

「幼な子のように」

マルコによる福音書 10章13～16節

聖学院大学附属みどり幼稚園 園長 山川 秀人

今日は聖学院大学の全学礼拝の場で、一緒に聖書の御言葉に聞く機会を与えられましたことを感謝申し上げます。ここには子どもについて学びを行っている『児童学科』や『子ども心理学科』の学生の方達もいらっしゃるかも知れませんが、先程司会者の先生に読んで頂いた聖書の箇所にあったように、主イエスは『幼な子のように神の国を受けいれる者でなければ、そこに入ることは決してできない』と言っています。この聖句自体は、私は以前からよく見聞きしていた箇所ではあるのですが、良く言われるような子どもの性格としての「素直さ」とか「従順さ」というほどの意味で納得し、なるほどなどは思っていました。それほど真剣に自分自身の問題意識として考えたことはほとんどありませんでした。ところが幼稚園の園長をさせて頂くようになってから、毎日多くの子ども達と接する中でこのみ言葉が実感として迫ってくるように感じています。

『幼な子のようにならなければ』、このことは一体何を意味しているのでしょうか。そのためには、私たちはまず「幼な子」とはどのような存在なのかを理解する必要があります。幼な子とか幼児と言われる場合、それは児童福祉法上からは満一歳から学齢つまり小学校へ入学する前までの子どものことを指します。この時期、幼児は様々な発達や成長を遂げるのですが、心の成長についてみると、次第に言葉を覚え行動範囲が広がると共に好奇心も拡がり、また自己主張も始めるようになります。何でも自分でやろうとする意欲が次第に強くなってくる時期です。幼児はこの時期、まるで真っ白な心のキャンバスに絵の具を落としていくように「あらゆる事を吸収」し、そして「自ら取捨選択」しながら成長を遂げていくそんな時期なのです。このことは、別の言い方をすると「何でも受け入れられる」ということにもなります。伸縮自在で心に柔軟性があり、必要があればそれはどんどん広がっていくことも可能な状態です。

一方、そのことと対照的に言うならば、心に柔軟性がない人はそうではありません。一般的には大人になるほど、人生の経験が長い人ほど、自分の考え方や凝り固まった固定観念や先入観、偏った情報に基づく常識などに縛られてしまうことが私たち人間には多いのではないのでしょうか。自分自身の正論を振りかざし、周囲の意見や考えを裁き、否定する。大人になるということは、案外そのような側面もあるのではないかと思います。心や頭に柔軟性が失われていく、そのような状態です。全ての大人がそうだと言うことではありませんが、程度の差こそあるものの、人は大人になるに連れて自己中心的な世界を作り上げていく、そのような存在なのかも知れません。しかし、自分と異なる考え方を頭から間違いだと決めつけたり否定したりするのではなく、また、くだらない考えだと決め込むのではなく、あるがままに受け止め包み込むように自分の内に取り込んでいく。そしてその中から、本質的なこと、真

理と考えられること、最も大切なものは何かを自ら見いだしていくことが出来る人。それが主イエスが言う「幼な子」のような人ではないかと思うのです。

私は、毎日子ども達と接している中で驚かされることが色々あります。年長5歳児くらいになると既に何度も神さまやイエスさまのお話を聞いているので、時々子ども達からこういうことを質問されることがあります。「園長先生、神さまって本当にいるの?」、「神さまがいるのにどうして悲しいことがいっぱいあるの?」、「イエス様って死んでしまったのに生き返ったの?」、「神さまの国ってどんなところ?」。これらは実際に私が園児である子ども達から質問されたことです。どれもキリスト教の本質的な内容に触れる質問だと思いますが、これらの質問が人間としての人格形成・発達段階にある幼児から発せられることに本当に驚きを感じるものがしばしばあるのです。大人の場合は、「こんな事を聞いたら恥ずかしいのではないか」とか、頭から「そんなことはあり得ないことだ」とか、まずそのような思いが先行してなかなか素直にこの子ども達のような質問はできないのではないのでしょうか。

『幼な子のように神の国を受け入れる者でなければ、そこにはいることは決してできない』。そのように語った主イエスの言葉から観た場合、神の国に“入れる人”と“入れない人”の違いというのは、結局のところ“幼な子のような人”か、あるいは“幼な子のようでない人”かの違いに帰することになります。そして今、たとえ今は幼な子のようにではない私たち大人も、幼な子のような人になれるのです。一切を裁くことなく、先入観や偏見を持たずに物事があるがままに観て受け入れていける“幼な子のような人”にです。

聖書の中からこの“幼な子のようでない人”と“幼な子のような人”をよく表していると思われる箇所をご紹介します。それはルカによる福音書 23 章 39-41 節です。この場面は主イエスと共に二人の犯罪人が一緒に十字架に掛けられて死刑に処せられる場面です。

『十字架にかけられていた犯罪人の一人が、イエスをののしった。「お前はメシアではないか。自分自身と我々を救ってみろ。」すると、もう一人の方がたしなめた。「お前は神をも恐れぬのか、同じ刑罰を受けているのに。我々は、自分のやったことの報いを受けているのだから、当然だ。しかし、この方は何も悪いことをしていない。』』

どちらが幼な子のような人であり、どちらがそうではないかおわかり頂けると思います。最初の犯罪人はこれまで自分が聞いてきた偏った情報や既成の固定概念に捕らわれ、イエスという人物を評価しそれによって裁こうとしています。一方、もう一人の犯罪人は自分自身の死に直面して一切をさばくことをせず「幼な子」のように自分の心を澄ませ、物事があるがままに観てそのまま受け入れようとしています。おそらくこの時、この一方の犯罪人は瞬時にわかったのではないかと思います。このイエスが実はどのようなお方なのかということ。

最後に、主イエスが「幼な子のように」とおっしゃった時、それは「自分は大人だ」、「何もかも分かっている」、と思いがった私たちに対する批判の意味もあったのではないかと思います。大人である私たちが心を入れ換えて幼な子のようになるためには、ただ無邪気に幼な子になれるわけではなく、そこには自分に対する苦い反省が必要だと言うことです。主イエスが「幼な子のようにならなければ」と

言われたのは、私たち大人に対してです。自分の知性を頼りにし、自分ひとりの力で生きていかなくてはならないと藻掻き苦しみ、つっぱり、いつも肩をいからして生きて行こうとする私たち大人に対して、主イエスは「そんなに肩をいからす必要はない。幼な子が親を信頼するように、私たちも父なる神に信頼し全てを委ねて生きて行って良いんだよ。」、と言いたかったのではないのでしょうか。

2014年12月9日 聖学院大学 全学礼拝